広島県立文書館収蔵文書展

遺された日記たちが語ること

平成30年3月27日〔火〕～6月9日〔土〕

はじめに

二十一世紀に入り、ウェブサイトが発展するにつれ、日本でも個人的な体験や感想などを、他人に読んでもらうことを目的で、写真入りで時系列に日記のように更新するブログがウェブ上に乱立するようになりました。ブロガーでないとしても、継続的に日記をつける人も多いのではないでしょうか。夏休みの宿題で日記をつけた経験は誰でもあるはずです。このような過去の日記を読み返すと、当時の記憶が蘇り、タイムスリップしたような気分になります。

日記は、歴史学の分野では、後世の編纂物などとは異なり、書簡や手記などとともに、同時代の人が書いたことが明らかな、代表的な一次史料です。日記からは、その時代に生きた人々の当時の息遣いが手に取るように伝わってきます。

文章による記録である日記は、個人が日々の出来事や心情を主観的に書く「日記」と、業務日誌や議事日誌、学校日誌、航海日誌、作業日誌など、組織の記録として、人に見られることを前提として客観的に書く「日誌」とに大きく分類できます。

広島県立文書館では、江戸時代から現代に至るまで、有名・無名に関らず、また、原本だけでなく複製資料を含めて、多種多様な日記や日誌を収蔵しています。その中には、同じ家で百年以上、数代にわたり書き継がれた日記もあります。当館では、その中から、これまで広島心学者の日記「宮本愚翁日記抜粋」一冊と、広島藩家老東城浅野家の家臣、村上彦右衛門の日記「村上家乗」続編七冊を、資料集として刊行してきました。

本展では、当館が収蔵するさまざまな日記を通して、日本人はなぜ日記を書き、それを遺したのか、これらの日記からどのようなことが読み取れるのか紹介します。広島のこれまで知られていなかった歴史の一コマが、そこに綴られているかもしれません。

広島県立文書館

一　日記と文学

日本の日記は、古代律令制において、宮中の官人たちが日々の出来事などを、具注暦という暦面などに日を追って書き継いだ「日次記」に遡ることができるという。平安時代になると、皇族や貴族たちも私日記を遺すようになるが、これらはほとんどが漢文で書かれていた。

平安時代になると、仮名文字による紀行文学、紀貫之の『土佐日記』が生まれる。『土佐日記』は、時系列で書かれた点では日記の形式を備えたが、単なる個人の記録ではなく、自身が詠んだ和歌が入ることにより、周囲に読まれることを意識したものであった。これ以降、貴族の女性たちが『蜻蛉日記』（藤原道綱母）や『紫式部日記』、『更級日記』（菅原孝標女）、『十六夜日記』（阿仏尼）などを仮名文字で残すようになり、女流日記文学が花開くようになる。

江戸時代に入ると、紀行文学は輝きを失いかけたが、流麗な文章に珠玉の俳句を散りばめた俳聖・松尾芭蕉の俳文紀行日記『奥の細道』が登場するに至って、芭蕉を慕う俳人たちにより、『笈日記』・『梟日記』（各務支考）などの作品が生まれ、広島でも俳人・飯田篤老が『温泉津日記』を著した。また、広島城下の町人には和歌に深い関心を寄せる者が現われた。漂泊の歌人として知られる似雲と親族の間柄にあった京橋町の平野屋（松井）古泉が、多くの自詠の和歌を旅行日記の中に残し、京都の澄月に和歌を学んだ同町の縄屋（保田）九左衛門（福抱）も、『石風呂入治記』など洗練された紀行文学を遺した。

十六夜日記（写本）　天明７年（1787）
保田（義）家文書（199808-394-27）

鎌倉時代中期の女流歌人，阿仏尼によって書かれた紀行文の日記文学。阿仏尼は，遺産相続をめぐる訴訟が京都では決着しないため，幕府の裁決を仰ごうと，弘安２年(1279)10月16日，京都から鎌倉へ下った。「十六夜日記」は，そのときの紀行と，鎌倉での生活の記録，勝訴祈願の長歌を内容とする。書名は出発の日が十六夜に当たっていたことによる。

これは，万治２年（1659）出版の「十六夜日記」を，天明７年４月までに，保田九左衛門忠昌（のち福抱，1759～1823）が筆写した写本。

若い頃から和歌に親しみ，京都の澄月に師事した忠昌が和歌の手本にしたのは，古今和歌集，伊勢物語などの古典であった。澄月から，古今和歌集，伊勢物語を暗記するほど読むよう教えを受けた忠昌は，和歌を学ぶ目的から「十六夜日記」も筆写したのであろうか。

土左日記抄　上・下　寛文元年（1661）
保田（義）家文書（199808-372-９～10）

「おとこもすなる日記といふものを，をんなもしてこゝろみんとてするなり」と始まる紀貫之の「土佐日記」は，日記文学の先駆けとなった作品。本来，男性官人が漢文で記す日記を，仮名中心の和文で書くために，書き手を女に仮託したもので，和歌が57首入る。貫之一行が国司として赴任していた土佐国から京へ帰る55日間の旅路が日記風に書かれている。

「土左日記」は古くから盛んに研究され，多くの注釈書が発表された。この『土左日記抄』は，江戸時代前期の歌人・俳人で，古典研究に力を尽した北村季吟による注釈書である。

石風呂入治記　文政３年（1820）
保田（義）家文書（199808-86）

作者は保田九左衛門福抱。石風呂は瀬戸内地方に点在する石積みの蒸気風呂で，厳島の石風呂は元禄頃から湯治客で賑わったという。

福抱は厳島の石風呂へ頻繁に通い，一定期間厳島に滞在した。「石風呂入治記」は，文政元年から同３年まで３度にわたり，厳島へ往来した紀行文を推敲してまとめた紀行文学である。福抱は，入治の合間に，参詣のため来島する他国人と語らい，島内を廻り，舟で室積や岩国など防州浦々を遊覧して歌を詠んでいる。右丁は室積海岸の絵図。

温泉津日記　上・下　文政３年（1820）
平賀家文書（198803-10657～10658）

著者は，広島藩の下級藩士で俳人，多才な文化人として知られ，『知新集』の編者でもある飯田篤老。

篤老は文化10年（1813），脚疾治療のため石見国温泉津へ湯治に出かけた。２月22日に駕籠を雇って広島を出発，同月26日に温泉津へ着いた。

文政３年に広島などで出版された『温泉津日記』２巻のうち上巻は，芭蕉の『奥の細道』のように，旅先で触れた風物や人情などを書いた文章に，旅先で詠んだ発句を織り込んだ文芸作品となっている。

梟日記　元禄11年（1698）
吉井家文書（200612-648-71）

作者は，松尾芭蕉（1644～1694）の高弟で，蕉門十哲の一人にも数えられる各務支考（1665～1731）。支考は，元禄11年４月に難波から九州へ向けて旅立った。芭蕉がついに果たせなかった西国行脚の夢の実現でもあった。瀬戸内を舟で経由して，５月16日に尾道から竹原へ入った。19日に同所を出立，陸路で四日市を経て広島に至り，22日には宮島参詣を果たし，「燈籠や　いつくしま山　波の華」などの句を詠んだ。

二　近世の日記

江戸時代の「日記」という表題の資料を開いてみると、数字が並ぶ「大福帳」や「金銭出納簿」など、商売上の取引や経理資料であることが少なくない。それは、「日記」が毎日つける記録と意識されていたからにほかならない。しかし、それ以外の日誌や日記が数知れず遺されていることも事実である。

それは、江戸時代に紙や筆記用具が普及するようになり、藩庁や町方・村方など公的な役職などで、業務遂行上の重大な事件や、上申下達文書の控えなどを役用日誌に記録し、役の交代に伴ってこれらを引き継ぎ、業務の参考に利用するようになったためである。

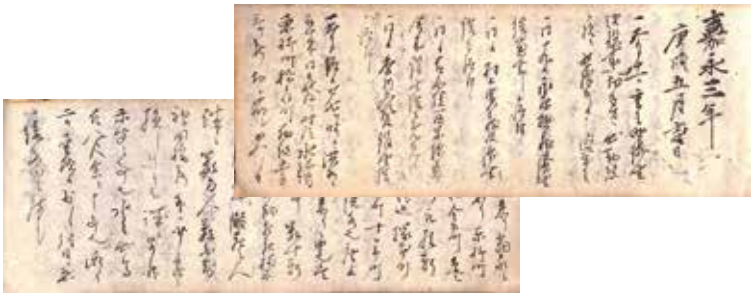
また、私的日記の書き手は、江戸時代以前には貴族や武家の一部だけに限られていたが、江戸中・後期には識字率が上昇し、裕福で、時間的に余裕のある町人や農民などが現われると、日常生活や周辺の出来事などを書き遺すようになった。

更に、江戸時代は、寺社参詣や名所見物が流行し、街道や宿泊施設なども整備されたことで、比較的安全、快適に旅ができるようになったため、多くの人びとが旅立ち、旅先での体験や驚きを書き綴って身近な人に伝え、後々の参考にしようと多くの旅日記を遺した。

役用之日録　一　　享保４年（1719）～享保５年　　堀田家文書（201606-１）

三次藩城下町の三次町は，五日市町・内町・十日市町の三か町から成る。各町には町年寄以下の町役人があり，この三か町を数名の大年寄が三次町奉行の支配下で統括した。

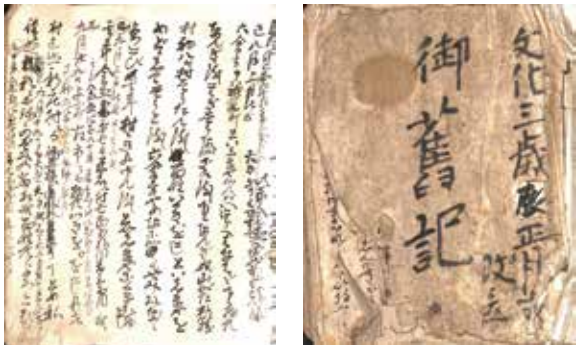
これは，三次町大年寄が，月番で公務の内容や町内の出来事などを記録として書き残した日誌。



諸事日記　　嘉永３年（1850）　　保田（義）家文書（199808-６）

広島城下京橋町の縄屋本家（保田家）の日記。表題からは，日記の性格を読み取れないが，城下の綿座役所勤務のことや，暑中見舞いなど，商家相互の交際についても記す。

嘉永３年６月１日の日記には，広島城下町を襲った「前代未聞」の水害について記している。縄屋も座板まで水に浸かり，神田橋が落橋した。特に中島町，塚本町，十日市町など西部の被害が甚大で，座上４尺（約1.2メートル）まで水が来たという。



御旧記　　文化14年（1817）～明治14年（1881）　　中垣家文書（199706-１）

約60年間にわたる日記風の年代記で，作者は沼田郡伴村の長百姓を勤めた新作と思われる。天候や物価の変動に関心が高く，災害や事件に関する記述も目立つ。口語調で，ひらがなが多用され，文字もたどたどしい。当時の農民の関心事や教養，言語などを知ることができる。

鶴亭日記　二～四六　文化４年（1807）～天保11年（1840）

野坂家文書（198802-492-１～45）

賀茂郡寺家村の医師，野坂完山（三益・鶴亭，1785～1840）は，地域医療や社会事業に尽したほか，私塾を開いて，医生や僧侶らに医学・儒学を教え，俳句や漢詩にも優れた作品を遺した。

30数年間にわたる精細な日記「鶴亭日記」からは，昼間は医療に，夜は塾生への教育という多忙を極めた完山の生活ぶりや，当時の農村事情などを知ることができる。また，訪れた全国の俳人を迎えて行った400回を越える連歌興行や，1,000作を超える漢詩，見聞・調査した寺社や遺跡などの記録もここに書き残した。

村上家乗　後編巻廿九（断簡）　　天保９年（1838）

広島県立図書館移管文書（200811-71）

「村上家乗」（広島大学文学部日本史研究室蔵）は，広島藩家老，東城浅野家に仕えた村上勇蔵信志（1753～1808），星右衛門邦韶（1793～1846），彦右衛門邦裕（1814～？）が３代にわたって書き遺した，安永７年（1778）から明治14年（1881）まで，全219冊に及ぶ武家日記。職務や仏事・年中行事等の参考とするため，家族で読まれ，利用されていた。

広島城下町における武家の生活を知るには，武家日記は欠かせないが，原爆等の被害で多く遺らない中，「村上家乗」は天候や公務以外にも，東城浅野家や他家老家の家臣，広島藩士との交際，年中行事や見聞した事件，余暇の過ごし方など私的な日常生活まで，細かな筆致で詳細に書き綴られている。

これは，星右衛門による天保９年日記の断簡。星右衛門は釣り好きで，７月10日には，同僚と息子や娘を連れて，古川の奥へ釣りに出かけ，「フエッソウ」という魚400余を漁した。

雲州往来並びに石州湯ノ津紀行　一番（上）・二番（下）　年不詳

保田（義）家文書（199808-34・28）

出雲神社参詣の旅日記。辻村たか女，保田福抱ら男女５名と，人夫や駕籠舁きとして雇われた９名，計14名が旅の一行である。一番帳が往路，二番帳が復路の旅日記となっている。

一行は途中で観た風景を絵に収め，道すがら詠んだ和歌をこの旅日記に認めたので，５名合作の様相を呈している。一番帳の絵は下三田附近，二番帳の絵は宍道湖の湖水である。

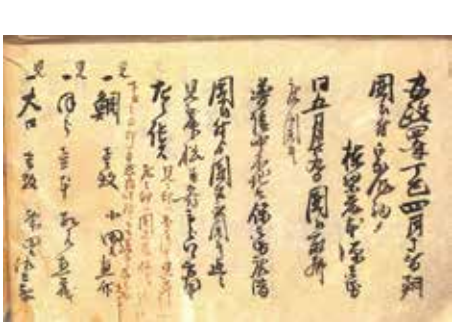
一行は３月23日に広島を出発，三田街道を北上し，25日に三次で宿泊，布野宿等を経て４月１日に出雲大社へ参詣した。帰途は一畑薬師も参詣した後，石見国温泉津温泉に立ち寄った。同月８日に比和へ抜け，庄原・甲山・三原・尾道などを経て同月17日に帰宅した。

長崎航海日誌　弘化５年（1848）　山田家文書（198820-77）

広島藩下級藩士で，船手方御船頭の家に生まれた山田左仲太は，広島藩の13反帆（約200石積）の帆船，勢至丸に乗り込み，操船修行のため，瀬戸内海から長崎へ航海した。これはその航海日誌で，折りを見て海岸線の絵図なども日誌に書き込んでいる。

３月18日に江波沖に停泊する勢至丸へ乗り移った左忠太は，23日に出航，宮島を過ぎる頃から，一緒に乗り込んだ水主から操船技術を伝習した。

右丁の絵図は玄界灘に浮かぶ地島（福岡県宗像市），左丁の絵図は加部島（佐賀県唐津市）。



永代日記　嘉永元年（1848）～安政５年（1858）

後藤陽一資料（200901-95）

西国街道に面した広島城下東横町北側（現在の本通りの西端附近）で，傘・荒物卸売商を営んでいた多田与市（平沢屋）の日記。冠婚葬祭や見舞・年賀などの音信物や，料理の献立などが中心で，日記というよりも覚書の性格が強い。

道中安楽記　壱～四　天保９年（1838）

千葉家文書（198812-371）

安芸郡海田市の商人，神保屋（千葉）八郎太とその分家の恭平は，天保９年３月23日に広島から乗船し，四国の道後を皮切りに，奥州松島まで足をのばす遠出の旅に出た。その日程は161日間にも及ぶ。大坂以東は，殆どが自らの足が頼りの旅であった。これはその道中日記である。裕福な町人である２人は，天保飢饉もまだ醒めやらぬ騒然とした情勢の中を，名所・旧跡の見物や寺社参詣にとどまらず，温泉では旅の疲れをいやし，各地で名物料理を食し，実に気儘な旅の生活を送っている。

修行日誌　明治３年（1870）

桑原家文書（199304-66）

桑原家は広島藩船手方の下級藩士。広島藩では文久３年（1863）に軍艦方役所を設置して軍艦・蒸気船を管理し，御船手水主から水火夫を選抜，任命した。桑原俊太は水火夫となって軍艦に乗り込み，戊辰戦争で各地を転戦した。

この日誌からは，作者が，戊辰戦争後の明治３年に長崎の英国人「ロビソン」のもとで，蒸気船操船の訓練に励む様子がうかがえる。英語を学んだ作者は，漢字縦書きの陰暦に加えて，陽暦を横書きの英語とアラビア数字で，「octobar　1」，「sonday」などと記載している。

練兵稽古諸事日記　明治元年（1868）

木原家文書（199509-779）

明治維新直後，広島藩からは農兵隊の神機隊や応変隊などが戊辰戦争に参加していた頃，藩内各村でも武芸稽古の機運が一層高まった。賀茂郡国近森近村（現東広島市黒瀬町）では調練用の太鼓や砲薬などを村で購入し，有志が集まって２月から調練稽古が開始された。この「練兵稽古諸事日記」は，日々の参加者などの記録である。同村では３月になると盪寇隊と命名され，毎月５・15・25日に鉄砲操練稽古を行うことが申し合わされた。

三　近代の日記

近代になると、更に多くの日本人が日記をつけるようになる。この契機になったのが、大手出版社の博文館（現博文館新社）が明治二十八年（一八九五）前後に出版した『懐中日記』と『当用日記』である。三六五日の天気や寒暖、周辺の出来事や行動を記述するよう欄が設定され、大部な巻末付録を加えた書き込み式の日記帳は人気を博した。次第に他の出版社だけでなく、銀行や新聞社、印刷会社などまでも日記帳を出版するようになり、日記帳市場は活況を呈した。それに伴い各社が独自色を出そうとターゲットを絞った日記帳を発売したため、多種多様な日記帳が出現した。手帳日記が登場し、筆・墨から鉛筆やペンなどへ筆記具が変わったのもこの時代の日記の特徴である。

近代の私日記では、書き手周辺の出来事や行動だけでなく、その内面的な悩みなどの秘事までも書かれた。その私日記を通覧すれば、書き手の思想や人間関係の変遷などまで長期的に追体験することも可能となる。

近代になると、日記は教育現場で利用されるようになった。夏季・冬季休暇では日記の提出が強要され、教師の検閲を受けた。多くは誤字の指摘や勉強の助言であったが、生活態度を叱咤される場合もあり、教師による学生生活への介入でもあった。

小野友五郎日記　　元治元年（1864）～明治31年（1898）

小野家文書（198909-411～438）

小野友五郎（写真①，1817～1898）は，長崎の海軍伝習所で学んだ後，万延元年（1860）に咸臨丸の航海長として渡米，帰国後には幕臣に取り立てられ，２度の長州征伐では幕府の動員計画に携わり，慶応２年６月には第二次征長の大島攻撃に参加した（写真③）。慶応３年には再び渡米して，幕府軍艦や小銃購入に当たった。維新後は入獄したが，許されて民部省や工部省で鉄道路線測量などの業務に当たった。

当館には，元治元年から亡くなる明治31年まで，一部を除く28冊の日記が遺されている（写真②）。友五郎は，慶応３年１月までは和綴じの帳面に筆で日記を書いていたが，同年10月からは，横罫の入った小型の革製手帳に鉛筆で書くようになる（写真④）。友五郎はこの間に再渡米しているので，米国でこの手帳と鉛筆を入手したのであろう。

①

②

③

④

宮本愚翁日記　　明治元年（1868）～明治35年

宮本家文書（198804-26～36）

下級広島藩士の家に生まれた宮本愚翁（写真⑤，亥三二，1839～1903）は，著名な心学者の父・中村徳水の遺志を継いで心学を志し，明治維新から廃藩置県にかけて，藩命により領内を巡回して各地で心学講話を開いた。廃藩置県後は戸籍係吏員として広島県庁に勤務し，明治31年からは下宿屋を営む傍ら，赤十字社広島県支部看護婦養成所の修身の講師に迎えられ，青年・女子の教育活動に従事した。

愚翁は日記を欠かさずつけたが，現在伝わるのは，日記三～七を自ら整理，抜書きした「日記抜粋」１冊と，「日記」八と十一～十九の10冊，計11冊だけである（写真⑥）。

国家体制や社会の大きな変革期であった明治維新直後の日記抜粋には，広島の文明開化の様子など興味深い記述が，細かな筆致でびっしり記されている（写真⑦）。

⑤

⑥

⑦

懐中日記帳　　明治８年（1875）

海城家文書（198808-229）

安芸郡熊野村の庄屋，海城家の長男に生まれた荻野悦太郎は，志を抱き，陸軍士官学校の招募に応じて明治８年春に上京し，掬養社という私立外国語学校で英学を学んだ。８月19日，悦太郎は満月を観ながら，昨年の厳島管絃祭に友人らと参詣したことを思い出し，「もろともに　思ひいづるべ　月なれば　去年の今宵は　厳島にて」などと詠んだ。

広島県会議事日誌　　明治17年（1884）

佐々木家文書（198814-１～３）

第１回広島県会が開会されたのは明治15年５月のことであった。議事日誌は，開会日の日ごとに作成され，議員に配付された筆記録で，議会終了後に表紙などの装丁を加えて印刷された。

直員日誌　　大正２年（1913）

山野村役場文書（199607-1118）

直員とは当直業務に当たる職員のことで，本来の業務とは異なる定期的な巡回，電話の受理，緊急時の対応などを行う。

役場などでは，平日だけでなく土日や休日でも昼間は日直，夜間は宿直が置かれ，日誌を遺した。

備後府中・延藤家の日記　　安政５年（1858）～昭和55年（1980）　　延藤家文書（199110-585ほか）

備後府中の延藤家は江戸時代から続く，備後の代表的な素封家。同家は，５代吉兵衛重醇（写真③,1873～1965）の時代に，企業家として大きく発展を遂げ，備後銀行や両備軽便鉄道など企業設立に寄与してその経営に携わり，地域の産業発展に尽くした。重醇は質素倹約に努める一方で，公益慈善を目的とした社団法人備後報徳社を設立するなど，社会事業の活動も行った。府中町長にも就任している。

延藤家の日記は，４ 代吉兵衛重祥が当主であった安政５年から，５代重醇，６代艮亮の昭和55年まで，手帳日記を含めると100冊を超える日記が遺されている（写真④は手帳を除く日記）。重祥の日記は筆書きの竪冊であったが，５代吉兵衛重醇からは博文館の『当用日記』などの書き込み式日記帳を使用するようになる。

当用日記（博文館）　　明治33年（1900）　　延藤家文書（199110-3998）

東京で明治20年（1887）に創業された博文館（現博文館新社）は，明治28年に『懐中日記』を，翌29年に『当用日記』を発行して，本格的に書き込み式の日記帳を商品化した。同社は，戦前・戦後を通じた日記帳出版の最大手である。書き込み式日記帳は人気を博し，部数を増やすとともに，日記帳の広告によれば，明治33年（写真①）には２種類であったものが，昭和８年（1933）には16種類（写真②）となっている。

当館が収蔵する最古の博文館『当用日記』は，延藤吉兵衛重醇が使った明治33年のもの（写真⑤）。１日１頁で，本文欄の上に天気と寒暖，左に来訪・往訪欄がある。欄外には著名な詩歌や，過去にあったその日の出来事を掲載する。62頁に及ぶ附録「国民日用便覧」も充実している。

うさぎ日記　　昭和20年代

佐々木家文書（201719-１）

呉市立阿賀小学校６年生が書いたうさぎ飼育日記。歴史的仮名遣いがされているので，終戦直後と推測される。

学校での動物飼育は，児童の情操教育のため実施された。

吾家之歴史（明治32年日記）　　明治32年（1899）

平賀家文書（198803-5876）

東京のプロテスタント系出版社，警醒社書店から発行された小型の書き込み式日記帳。明治25年に初版が出版されているので，博文館の『当用日記』よりも歴史は古い。序文によれば，国家元気は家庭から湧くものなので，家庭の出来事を記録し，教育，そして自己を磨く鏡とするために家庭日記をつけるのだという。日記には，「往来」「為したること」「得たる思想」「社会の出来事」「雑事」の欄があり，欄外にはその日の出来事や，教訓が印刷されている。

主婦日記　　昭和28年（1953）

延藤家文書（199110-592）

山一證券株式会社が顧客の婦人向けに粗品として配布した書き込み式日記帳。この日記帳には，毎日の日記欄に収入・支出欄が設けられているほか，冒頭にも毎月の月計表があり，家計簿を兼ねている。延藤夫人は冒頭の月計表に収入・支出ではなく，毎日の夕食メニューをつけている。

夏休み日記帳　　大正９年（1920）

田原家文書（199402-８）

広島市内の高等小学校か高等女学校２年生の田原ゆり子（13歳）が書いた夏休みの日記帳。

７月22日，ゆり子は午前中に勉強してから，母親に連れられて大正４年に完成した物産陳列館（現原爆ドーム）を見学，帰宅後は手伝いをしてから，裏の川で泳いだ。

冬季休暇日誌　　大正３年（1914）

平野家文書（201405-188）

世羅郡津久志尋常高等小学校（現在は廃校）尋常科５年生の広瀬康蔵の冬休み日誌。

教師は休暇後に提出された日記に誤字などないか点検，添削し，成績を付けて生徒に返却した。表紙には朱字で「佳○」とある。

冬季休暇中日誌　　明治36年（1903）

千葉家文書（198812-497）

広島市内の中学校に通う千葉慶四郎は，冬季休暇中に安芸郡海田市の実家に帰省した。明治30年代の中学校では，既に長期休暇中に日記をつけることが求められ，休暇明けに教師の添削を受けた。教師は朱字で意見を書き込み，日誌全文を読んで「字句ニ注意セヨ，不明瞭ノ点多シ」と注意する。

四　戦争と日記

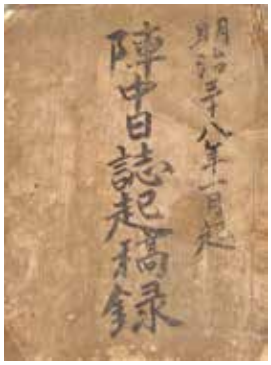
宇品港が完成した明治二十二年（一八八九）から五年後、広島まで山陽鉄道が開通した。港と鉄道が整備されたことにより、この年に起こった日清戦争で、広島には大本営が置かれ、全国から山陽鉄道を使って広島へ集結した兵士たちは、宇品港から船で大陸へと向かった。日清戦争から日露戦争、更には日中戦争、太平洋戦争と、宇品港からは多くの兵士が戦地へと出征していった。その兵士たちは戦地の最前線にあっても詳細な日記を綴った。国家のために戦場で死ぬよう教育された兵士たちの日記には、戦場で戦いを勝ち抜く決意を語るとともに、生きる希望も書き綴った。

一方、国内にあっては、さまざまな日記の中で銃後の生活が描かれている。役場は村の住民を戦地へ送り出す事務を執るため、「召集日誌」や「動員日誌」を作成した。労働力不足を補うため、国家総動員法に基づき、工場などへ動員された学生の日誌には、苦しい任務を負いながらも、日本の戦勝を願って自らを鼓舞する言葉が並ぶ。

戦争が深まるにつれ紙は不足するようになり、日記をつけることさえ困難が伴うようになる。そして、被爆当日の救護所の日誌には懸命の救護の様子が描かれ、八月十五日の日記には、悲しみと絶望の彼方に、国家再建の決意と希望が垣間見える。

陣中日誌起稿録　　明治38年（1905）
榎本家文書（200206-39）

鳥取市出身の榎本武臣は，陸軍工兵中尉として日露戦争に従軍し，奉天会戦における激戦の模様と，部隊の活動を日誌に残した。



広島臨戦地日誌　　明治32年（1899）
保田（義）家文書（199808-411-26）

日清戦争で，広島の第五師団に出兵命令が下された明治27年（1894）６月５日から，日本赤十字社が救護員業務を終わる明治28年８月１日まで，広島県が行った軍事行政事務の詳細について，月日を追って日誌風にまとめた一冊。この記録は戦後も県庁内で保管されていたが，公けにされないことを惜しんだ段原村の志熊直人が，許可を得て発行した。

海軍充員召集日誌　　昭和16年（1941）～
御調郡奥村役場文書（199301-1-10）

昭和12年に日中戦争が始まると，軍務に就くよう命じる召集令状（赤紙）が，在郷の将兵へ盛んに発行されるようになった。海軍の場合は，召集令状は各地の海軍人事部から警察署を通じて町村の役場へ届けられ，兵事係と呼ばれる担当者が応召員に直接令状を手渡した。御調郡奥村（現尾道市御調町）の場合は村長，村長不在の場合は助役がこの事務を担当している。その事務は夜間であっても，所定の手続きで進められた。

岡田正の従軍手帖　　昭和15年（1940）
岡田家文書（200014-18）

福山市の岡田正は，昭和15年２月に召集されて歩兵第41聯隊へ入隊，兵砲中隊へ配属されて，６月23日に福山を出発，翌日宇品港を出港した。その後中国から南方戦線を転戦し，昭和18年２月６日，ニューギニア島ノーザン州マンバーで，胸部に爆弾の破片を受けて戦死した。

戦死後に遺族へ返還された従軍手帖には，福山駅で出征兵士を見送る絶大な歓呼を受け，「親ヲ見テモ友ノ見送ヲ受けモテ（ママ）涙モ出ネバ又悲しみもない　唯四ヶ月半の願ひかなった喜ひト歓呼の嵐に感激のみ」であったと綴った。

清水高雄の従軍手帖　　昭和13（1938）～14年
清水高雄文書（201501-１）

安佐郡八木村出身の清水高雄は，昭和13年５月に歩兵第11連隊へ入隊，９月10日，中国に向けて貨物船立山丸で宇品港を出港した。

清水は出港の日から，戦地での生々しい戦闘の場面を含め，毎日この手帳に日記をつけた。昭和14年３月10日午後３時頃，北京郊外の房山攻撃で麦畑を前進中，「死狂に抵抗」する敵から銃弾を受けた。当たった気がしたが，更に30メートル前進したところで，ようやく靴から出血しているのに気付いた。「敵弾全く雨の如く附近に飛んだ」ため，２時間身動きが取れず，夕方５時になって担架隊に救出された。

山野村警防団日誌　　昭和14年（1939）
山野村役場文書（199607-4862）

昭和14年に警防団令が施行されると，広島県は県内市町村ごとに警防団を結成するよう促し，同年４月時点で県内には360余りの警防団（団員８万余人）が置かれた。

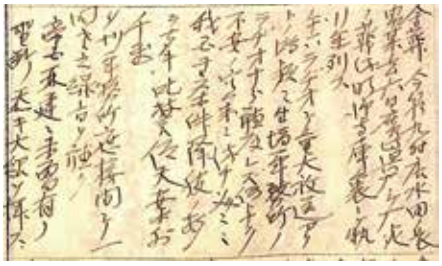
山間部の芦品郡山野村でも地区ごとに警防団が結成されている。この同村警防団第二分団の日誌によれば，同年８月下旬には，連日のように昼夜間に分けて，訓練空襲警報が発令される訓練が実施されている。

広島女子専門学校一年生の動員学級日誌　　昭和20年（1945）
後藤陽一資料（200901-110-２）

昭和12年に日中戦争が始まると，銃後を守る中等学校以上の生徒は，女学生も含めて軍需産業や食糧増産に学徒動員された。広島女子専門学校（現県立広島大学）の一年生91名は，昭和20年１月８日から倉敷市外の三菱重工業(株)水島航空機製作所で，広島女専報国隊として攻撃機の部品組立作業に従事した。写真左は国語科一年の日直がつけた学級日誌。

次第に昼夜を問わず空襲警報が頻繁となり，６月22日の公休日の朝，工場が大爆撃を受けて作業はできなくなった。それでも山中の工場で作業を続けたが，部品がないため仕事は減り，合間に授業を受けた。

８月６日，広島に敵機来襲があり，相当の被害が出たという報が伝わった。日誌は「これでへこたれてはならない，雄々しく明るく戦って行く私達にこそ勝利の鍵はあるのだ」と綴られて日誌は終わる（写真左下）。



延藤重醇の終戦日記　　昭和20年（1945）
延藤家文書（199402-４）

紙が不足した戦時中，延藤重醇の日記は３年利用できる連用日記帳を使用している。

終戦の日，重醇は広島で原爆のために亡くなった店員の長男の葬儀に参列した後，重大放送を聞いた。内容は聞き取れなかったが，日本が無条件降伏したことは理解でき，「仰天案外千万」と驚きを隠せない。しかし，「帝国再建ニ未曾有ノ聖断忝キ大詔」と受け止める。

明治大学生・今井勝司の戦中日記　　昭和17年（1942）
田原家文書（199402-11）

明治大学生の今井勝司が，三省堂『新学生日記』に，書き綴った日記帳。

旧制忠海中学校を卒業した今井勝司は，真珠湾攻撃直後，国を挙げて戦争に邁進する日本と，明治大学に受験する自分を重ね合わせ，日記帳の「新年の言葉」に，「一生の運命を賭けた一大決戦」の年と書いた。

無事合格し，上京した勝司は，好きな映画と食べ歩きの誘惑に負ける学生生活を過ごしていたが，４月18日，米軍による初の日本本土空襲を体験し，「唯ではおかぬ　今に見ろ　必ず復（復讐）はするぞ」と日記に綴った。勝司はこの直後，日本学生航空隊へ入部する。

被爆直後の草津大隊救護所日誌　　昭和20年（1945）
小川家文書（200603-２-５-４）

広島に原爆が投下された８月６日，小川早苗・国民義勇隊草津大隊長が記録した救護所日誌。救護所は市内53か所に設置されたが，救護の実情が記された記録は少ない。

爆心地から約４キロの草津地区は，被爆と同時に猛烈な爆風に襲われ，多数の死傷者を出した。更に草津地区へは，市内西部方面から火傷・裂傷・打撲・出血した負傷者が「雪崩の如く夢中となって押掛けた」。午前９時には，草津国民学校に応急救護所が設置され，佐藤救護隊長，陸軍長島隊，岩国燃料支廠の軍医も来援して救護活動が展開された。午後４時に同救護所に収容された罹災重軽傷者は545名であった。

田原廣一の東京歌日記　　昭和19年（1944）～21年
田原家文書（199402-２）

田原廣一は，広陵中学校を卒業して広島県庁へ就職したが，退職して上京，東京の外国商社に勤務し，荻窪に住んだ。昭和17年２月から「王冠」（帝国王冠製造所か），昭和19年３月から造船統制会勤務者用物資購入聯合会に就職したが，同会が翌年３月に解散したため無職となった。戦後は援助を受けず清貧な生活を送ったという。

画家で歌人の津田青楓（1880～1978）に師事した田原の日記は，戦中・戦後の混乱期の事件や生活の困苦を主題として，一日に２首ずつ和歌を詠み継ぐ形式を取る。

終戦翌日は，「戦遂に敗れたり」と題して，「でまは飛び　十年の苦しみ　今つきて　道ゆく人の　哀れその様」と詠んだ。

＊期間中，展示史料の入れ替え等を行うことがあります。

広島県立文書館収蔵文書展
遺された日記たちが語ること

発　　行　　平成30年（2018）３月27日
編集・発行　　広島県立文書館（担当　西村　晃）
〒730-0052　広島市中区千田町三丁目７-47
TEL（082）245-8444　FAX（082）245-4541
E-mail：monjokan@pref.hiroshima.lg.jp
印　　刷　　株式会社 呉精版印刷

【主な参考文献】

青木正美『自己中心の文学　日記が語る明治・大正・昭和』（2008年，博文館新社）
西川祐子『日記をつづるということ　国民教育装置とその逸脱』（2009年，吉川弘文館）
倉本一宏監修『日記で読む日本史』シリーズ（臨川書房，2016年～）